

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年
10月号
通巻542号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年10月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



下鳥見橋より鴉邑伝承地・生駒山を望む

矢追隆家(法主様)撮影(文・4頁)

法主矢追日聖の遺稿より

大倭大本宮伝承の紀(一)

編集部

まえがき

聖徳法主日聖(以下「法主様」と記す)はご自身の使命として、大倭神宮が「日本民族の原初祖霊並びに累代の遠祖の鎮まり給う霊地」であることを顕彰するために平成六年八月十五日に『大倭神宮伝承の紀』を顕わされました。その後、法主様の帰幽後に、その続編として自ら記された原稿が見つかり、本紙の昨年七月号と八月号に「大倭神宮伝承の紀・後編」として掲載させていただけました。それらの記事によって大倭神宮の伝承に関する法主様の深い思いが明らかになり、私たちにも大きな課題が投げかけられた気がいたしました。

ところがその後、大倭大本宮の地(大倭紫陽花邑)の伝承に関して書かれた法主様の御遺稿と、関連するメモがいくつか発見されました(注①)。そこには大倭大本宮の地についてのただならぬ因縁が語られており、大倭神宮と大倭大本宮とは密接につながったものであることを強く感じざるをえませんでした。

この遺稿の多くは、法主様のご生

母(注②)である日妙師の靈感によって感応された伝承を法主様が記録する形で記されています。中には、法主様の問いかけに対して日妙師が断片的にメモ書きしたものもあります。(※3頁の写真参照)

そうした事情から、この遺稿には断片的なものや内容が重複するものがまじっています。編集部としては、若干の解説や参考資料等を提示させていただくことはあるものの、あえて内容そのものには一切手を加えずに発表して、読者の皆さまにその意をくみとっていただくことにしました。

内容は大別すると、長曾根日子命の時代(注③④)のものと、聖武天皇・光明皇后の時代(注⑤)のものに分けることができるので、まずは長曾根日子命の時代のものから紹介することにします。

長曾根日子命の御住居の地

この時代に関する法主様の原稿はごく短いものなのですが、重大な内容を含んでいます。そのことを理解していただくために、少々長い文章になります。法主様が「すめらみこと」や長曾根日子命について『やわらぎの黙示』に書かれたものを、まず引用してみます。

《……この頃の大倭地方は農耕を主体とした聚落が各地にあつて、現今の大倭に在る「紫陽花邑」の如きいわゆる「神ながら」の集団生活が営まれていた。土地は神が造られたものとの信仰をもつて、個人の所有権など勿論約束されていなかったもので、自然と共同耕作によって生活の糧にした。いわば大家族構成によって現われた共産生活体ともいえるのだが、この集団には必ず統治の責任者といった頭の位置を意味する「すめらみこと」が厳存していた。この頃の「すめらみこと」の資格者は、各々その人なりの霊能力をもつていたので自分の分をよく知っていた。したがって根幹枝葉の姿の如く自ずから中央集権的な組織が合議制でなく「神ながら」にできていた。多色彩をもつた各集団(邑)が神意に応じて調和を保ち、無統制にして一糸乱れない統制のある、「大らかにして、和やかな」理想社会をなしていたといえる。彼等は祭政一致をもつて生涯を貫いていた。即ち霊界現界を一体とした思想とも見られる。彼等はまた何かの靈感があれば直ちにそれが自然霊であれ、人格霊(祖霊)であれ、更に動物霊であったとしても、誰一人異議をはさまず挙げ

注①

昨年(平成26年)、法主様の遺品を納めた拝殿東側のプレハブ内にて発見。

注②

瑞光院の茶の間で何かの折、法主様が「生母」とは「聖母」の意であると杉本順一さんに言われたことがある。

注③

長曾根日子命…
『古事記』では登美能那賀泥毘古、『日本書紀』では長髓彦であるが、法主様は、生駒山麓の榎根という地理的条件から「長曾根」の邑があり、その「すめらみこと」が長曾根日子命であると言われる。長曾根彦と表記しても意味上の区別はない。

注④

長曾根日子命の時代…
いつから始まったのかは分からないが、太古の昔、大倭神宮の霊地で降誕された饒速日命(別名、大國主命)より代々連綿として続く長曾根日子命の時代だが、ここでは主に農業生活を中心とした弥生時代の歴史を指すと思われる。弥生時代はBC3世紀中頃(BC10世紀くらいから始まる)の説もある)からAD3世紀中頃。

注⑤

奈良時代。

注⑥

(注⑧参照) 平成元年4月2日、法主様が請われて藤之木公民館でこの地域の歴史について講演された時の録音テープが残っている。その中で法主様は「古代人が住まいするのに一番良いのは、日おもてで水の良い所なんです」と言われ、昔は富雄川がもつと鷄峯寄りに流れていたもので、この台地に岸ノ上と

て祭祀し「まつろう」（順応）喜びを賑やかに捧げたものである。邑にある「すめらみこと」（日本書紀には君）は神から受ける靈威によって統治の任を完うし、邑人達に対しては日常生活の総親であり、指導者であった。

平素はこうした、純情にして神に帰一しながら農耕を営む人々ではあるが、その反面こうした平和境を守るための自衛的錬磨も忘れてはいなかった。弓矢、鉾、劍等を使用する武術はかなり長じていた。霊界人が指導者の体に憑って超人間的な修業を積ませていた。これは私の霊視の相であるが、私自身がこの経験をもっている、古代社会にあってもさもあるべき事実と私は信じている。

古代大倭地方（近畿）の各地に存在した「すめらみこと」の最高位に在った者は、歴代長曾根邑（鳥見）を都とし、ここに君臨していた天孫族の「すめらみこと」にして、『長曾根日子命』といった。……『やわらぎの黙示』129〜130頁

この長曾根日子命について法主様は次のように直截に記しています。

昭和二十五年八月三十一日開頭

現大倭教大本宮の地は、太古大倭の君、長曾根彦命の御住居の地にして、その御家族並に歴代御一族の御地にして、この地方一帯各地にその住を構えられていた。大倭神宮の東方台地（注⑥）はこの命の君として君臨ませし公の宮地であった。

大倭大本宮の地が太古において長曾根日子命の住居であったというのです。また、法主様の問いかけに対して日妙師が記したと思われるメモには、次のように書かれています。

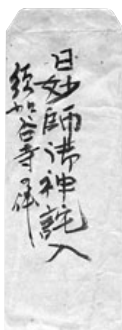
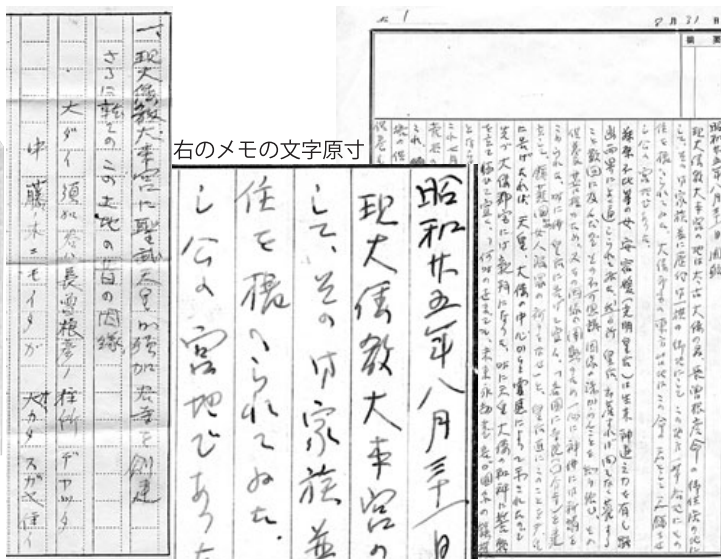
一、現大倭教大本宮に聖武天皇が須加宮寺を創建するに就てのこの土地の昔の因縁

（※編集部注 法主様の問い）

大ダイ（※代々）須加谷（注⑦）ハ長曾根彦ノ住所デアッタ
中、藤ノ木（注⑧）ニモイタガ 大カタスガヤ住イ

いう地名が残っている。上は神さんでもある。後の時代、郡山藩の旗本が住まいしていたので陣屋の井戸という名前の井戸が残っているが、元は「彦谷の井戸」（彦の泉）で、ものすごく豊富に水が湧く。そんなところから「藤ノ木の岸ノ上の台地」が「長曾根日子の住居の地に間違いのないだろうと思つています」と話しておられる。

右のメモの文字原寸



右のメモが入っていた封筒

また、同じ趣旨のことが別のメモにはこう記されています。

此ノ土地ノ昔ノ因縁ト云ヘバダイタイ(※代々) 須加谷ハ長曾根彦ノ住居(注⑨)
デアッタ 藤ノ木ノ住居ハ表ノ住居ダッタ(注⑩)

これまでも長曾根日子命については、法主様は何度となく書かれたり語られたりしてこられました。大倭大宮の地が長曾根日子命の住居の地であったとはつきり表現されたのは、これがはじめてです。

現在の太倭紫陽花邑の遠い源流がここにあったと感ずること、この地に立つ思いが変わってくるような感慨深い気持ちになります。

長曾根日子命の時代に関する今回の遺稿はこれだけですが、次回の聖武天皇・光明皇后の時代については、これよりずっと多くの遺稿があり、これまで耳にしたことのなかつたお話しも出てきます。(続く)

表紙写真について

林 修三

法主様は古代の人々の生活として、「古代では、現界の人間と霊界人(霊人)と同居していたという事です。今の人間はそういう感じ方は全然ないでしょう。ところが古代人は、自分の生活の中で一緒に霊界の人と生活しているという実感をもつてたんですね。信じてとか感ずるとかいうふうすつぺらいものじゃない」と語られ、また、

「大きな木とか山には、木の靈魂(生命力)、山の靈魂(生命力)はもちろんです、またそこに霊人が住んでいる場合もあるんです。古代人は霊界人と生活していたから、身近に交流できるんですね。霊人は現界人と交渉をもたなければ霊人としての喜びというか、靈的向上というものはないんだし、また現界の人間も霊界と交流がなかったら、これまたうまいこといけません。現代人には分かりにくいかも知れないけれど、古代の人は霊人と話もできるし、お互いに実感として感

じ合ってたわけですね」とも語られている。

『大倭新聞』第19号 昭和41年3月発行より

古代のおおやまとの邑々とは、この様な宇宙観に貫かれた人々の暮らしが営まれた原郷であろう。鶏邑、即ちとみの邑は、そのまつりごとの中心地である都として、おおきみの住まいする所であった。表紙の写真は、皇紀二六〇〇年(昭和十五年)を記念して政府による金鶏発祥地等の確定が行われた折、大倭神宮こそがその地であるとの旨をもつて法主様も参加された聖蹟顕彰運動の際、その運動の一環として著わされた『金鶏の黎明』(昭和十四年発行)の中で使用された一葉である。法主様ご自身の撮影と思われる。

大倭神宮・鶏峯のふもと、写真の右枠外辺り。

登美小川・富雄川。

下鳥見橋・国道308号線の砂茶屋で富雄川にかかる橋(撮影場所)。



表紙写真と同じ下鳥見橋より撮影 平成27年10月6日

注⑦ 昔の字名では、菅谷。現太倭紫陽花邑。

注⑧ 大倭神宮周辺の住所…

(現) 奈良市中町。
(旧) 大和国添下郡鳥見庄中村
字藤ノ木岸ノ上。

注⑨ 生活の場(私的)。

注⑩ まつりごとの場(公的)。



屋久島旅日記

岡山県瀬戸内市 中村 瞳

南無淨瑠璃光
海の葉師如來

われらの 病んだ心身を 癒したまえ

その深い 青の呼吸で 癒したまえ

南無淨瑠璃光

山の葉師如來

われらの 病んだ欲望を 癒したまえ

その深い 青の呼吸で 癒したまえ

山尾三省さんの『祈り』という詩の一節です。

二十数年前、私は初めて、ご本人による朗読でこの詩を耳にしました。シーンと静まり返ったお寺の本堂に座り、私は流れ落ちる涙を止めることが出来ませんでした。それは、野草塾に初めて参加した時のことです。この時の出逢いは、それからの私の人生に大きな影響を与えてくれました。

アトピーの長女の小学校入学を機に、私たちは農的暮らしをするために、大阪から田舎へ引っ越すことに決めました。九州へも訪れました。

その時、鹿児島島から屋久島まで足を延ばして、手塚家へ寄らせていただきました。



しかし、長旅で皆体調を壊して、屋久島の素晴らしさを体感でき



ず。三省さんとお茶を一緒にすることも果たせぬままで、後々悔やまれてなりません。もう一度、屋久島に行きたいと思いついて、遂にこの夏、七月十日、この日しかないというタイミングで、坂田洋美さんと小林千賀子さんの三人（写真上）で、出発できることになりました。とても遠く、ハードルの高かった屋久島なのに、関西空港から飛行機に乗れば九十分、あつという間に着いてしまい、不思議な感じがしました。

屋久島では、手塚賢至さんが忙しいスケジューリングを調整して、私たちを迎えてくださいました。パートナーの田津子さんも歓待してください、山尾春美さんも夕食に招待して下さって、皆様に変お世話になりました。感謝です。

賢至さんは、私たちが滞在中、屋久島のガイドをして下さって、行く先々で珍しい植物を見つけては教えて、屋久島が如何に豊かな島であるかを伝えて下さいました。亜熱帯から亜寒帯までの植物が、海岸線から山頂へと連続的に分布する垂直分布が見られることが、世界遺産に評価されたことや「ひと月に三十五日雨が降る」と言われる島には、千メートル級の山がなんと四十ほどもあるということ。車で走っていると遠くに連なる山々の間から、幾つもの白く流れる滝を目にする。本島に屋久島は水の島だ。

島に着いた翌日、しっかりとしたカッパと長靴をお借りして、雨の降る中を三省さんのお墓参りをさせて頂いた。森の中に入って行き、ぽっかりと開けた空間が広がって、そこに三省さんのお墓が佇んでいた。お参りを済ますと目の前に大粒の雨が降りだした。あの様な雨を、私は初めて見た。

それは、天と森との空間に太い棒のような線が引かれながら落ちてくる。私は見とれていた。三省さんが観させてくれているんだと思った。そして、三省さんが過ごされた愚角庵へ。三省さんを感じながら、その静かな空間で洋美さんは舞を捧げて下さった。静かに満たされた時間が其処にあった。愚角庵を後に、車は山道を登って行った。標高はどのくらいあっただろう、白谷雲水峽に案内して頂いた。森の中に入ると行くくと大樹の枝に違う種類の木が着生し、上へと伸びている。倒木からも新しい若い木が育っている。樹の根元には、苔がたつぷりの水を吸って広がっている。天より降ってきた雨を森は受け止め、多くの生命を養う。そして、その水は渓谷を滑り降り、川となり、やがて、森の豊かな水は、海へと注がれ海の生命をも養う。すべては、繋がるひとつのいのち。

翌日は、樹齢三千年の屋久杉に逢いに行った。その存在感は、ただ見上げるばかりで「ありがたい」と心の中で唱える。道を進むと展望台があり、広がる視界の先に見事な滝があった。千尋の滝という。霧のかかったその風景は、いつまでも見たいと思わせた。帰りには島の方々が賑わっている温泉に入ったが、これは熱かった。

屋久島最後の日は、空に青さが戻り、何だか雨が降っていないのが不思議な気さえた。飛行場に行く前に、海岸で石を拾うことができた。嬉しいお土産ができた。

今回の屋久島の旅は、自然だけでなく、人との出会いにも沢山の喜びを頂きました。感謝感謝であります。

すべての生命は繋がっていて、個々別々でありながら一体。皆で大きなひとつの命を生きている。だから、大安心の内に生きて行こう。不安や恐怖が人を争いへとかりたてるのだから。

鶴見さんがつないでくれた縁

足あと
足あと

NPO法人むすびの理事長

湯浅 進

紫陽花邑の一角にある「交流(むすび)の家」(以降、交流の家)の建設のきっかけをつくり、私たちをハンセン病療養所に隔離されている人たちと、全く知らなかったその世界へとつないでくれたのが、鶴見俊輔先生(以降、鶴見さん)だった。去る7月20日にお亡くなりになった。

この機会に、鶴見さんと大倭と交流の家がつながった縁、そしてその縁が今でも生きていることについて、私が関わってきたことも少し触れながら振り返ってみようと思う。

1963年、私は岩見沢(北海道)の高校から同志社大学に入学した。サークルは勧誘されて「新聞学研究会」(略称新研)に入った。その勧誘をしていたのが、小樽出身の道産子、大宮正勲さんともう一人は同姓の湯浅道子さんだった。

同郷と同姓、何か不思議な縁を感じて迷わず「新研」に入った。

この時の新研の会長が、いま大倭紫陽花邑に居る杉本順一さんだった。

新研にはワークキャンプのメンバーが多かった。そのメンバーには、紫陽花邑の多様な場をつくりだした柴地則之さん始め大宮、木村聖哉、樋口寛美、杉浩史、杉本さんたちがいた。後輩には矢部顕君が出てくる。

翌年に柴地・杉・杉本の三名は大倭紫陽花邑に入植する。

学部は皆な文学部社会学科(新聞学専攻)、ここには六〇年安保闘争後、国立東京工業大学を辞

して同志社にきた教授の鶴見さんがいた。キャンパーのほとんどが鶴見ゼミ生であった。

ある時、先輩たちに連れられて鶴見さんの研究室に行った。私は名前もどんな先生かも全く知識がなかった。

その時の話の中味は忘れてしまったが、ただ「安保が通っても、憲法九条は歯止めになりますよ」と力を込めて話していたのが今でも忘れられない。その話し方や醸し出す雰囲気は初対面から引き込まれてしまった。

少ししれるが、折も折、今回も安保法制が通ってしまった、しかし決して負けたわけではない。

時代の転換期にはいつも届く鶴見さんの「言葉」は聞けないけど、国会前の反対デモの中では、鶴見さんの顔写真のプラカードを掲げて抗議をしている人たちもいた。

あれから五十五年、「声なき声」をあげた鶴見さんの声は今でも伝わっている。

「勝てないけど負けない、それを繰り返す持久戦の中からし次の芽生えは出てこない」、交流の家の建設に反対運動が起こったときも「壊されたらまた建てる、壊されたらまた建てる。それですよ」と話していた。マイナスから、落ち込みから、失敗からその底まで戻って、繰り返し立て直すことの大切さを語ってくれた。

鶴見さんは1950年代頃からすでに療養所の中に「友人」と呼べる人たちをもっていた。

1963年5月、ゼミの授業中に「友人の白系ロシア人のトロチエフが東京のYMCAで宿泊拒否にあった」とめげらしく憤慨して「ライ(ハンセン病)は新薬によって治るようになったが、快復者が外部で宿泊する所がない」と話した。それを聞いた柴地さんを中心にしたキャンパーが「自分たちの手でライ快復者が泊まれる家を建てよ

う」として動き出したのが「交流の家」建設の発端であった。

柴地さんは、その一年前に福祉施設「大倭安宿苑」のワークキャンプで出会った矢追日聖法主に、土地提供のお願いをした。すると即座に「その田畑を使ったらよいやないか」といとも簡単に快諾を得ることができた。これによって紫陽花邑での建築キャンプが始まり、紆余曲折はあったが今日の交流の家がある。

柴地さんを間においてだが、鶴見さんと法主さんとは「同時代の隣人」(晶文社『隣人記』1998年)としてむすばれることになる。

この建設(運動)が始まって以来、鶴見さんは数多くワークキャンプの集まりや紫陽花邑へと足を運んでくださった。

1972年、東京での「交流の家」一〇周年記念講演では「高度成長から距離をとって、ゼロ成長の中でも暮らしていける心構えをもった、大倭紫陽花邑に日本の根拠地」を見て、また1996年2月、法主さんの通夜の席で「法主さんと何度かあっていると右翼とか左翼とかいう区別が全然なくなってしまうんです。人の深まりということが大切なことであって、その他のことは余り考えませんね。そのように私に働きかけた人でした。私の知っている大倭は、日本の古神道のもっている可能性をはっきり伝えるもので、またこういうものとして人間の中にのこってほしいと、そういう確信をもっています。『とおやまと』1996年5月号より抜粋要訳」とむすんだ。

「交流の家」が歩んだ半世紀、折々に触れて示唆に富んだお話を、しつくりと感じることは、で語り、時には行動を共にしていただきました。

鶴見さん、ありがとうございます。

(京都府八幡市在住)

大倭千一夜

(其の二十一)

昭和41(1966)年6月15日発行『大倭新聞』第21号より再録

医者泣かせの奇病

法主 矢追 日聖 (満53歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

天狗さん

私がまだ若い頃だったよ。ある霊界人がね、霊体と物体のことについて話されたことがありました。心霊科学など口にしてる連中なら涎たらして聞きたがる話ですが……。理論的な説明はできませんから、面白い経験だけを話すことに致しましょう。或る日、自宅ですが、すぎ間のない部屋で私は或る記録を書いていた。その時にね、急に一陣の風が部屋の中に起こって、頭から砂がかかったのですよ。驚きましたね。机の上や畳にはザラザラと砂がまかれていて、その上に深山の古木の枝に垂れ下がっている青い生々とした藻が落ちてくるんですよ。集めた砂はMQ現象液の空管に殆ど一パイありましてね。不思議に思っ、部屋中を流し目で調べましたが、天井では兎も走らないし、砂など落ちる筈がないし、部屋の取合にはは四枚の襖があるだけね。

ところがこれは鞍馬から大天狗が私の所へお祝いにきたから起こった現象だったんです。記録している内容が、これ等の天狗さんに関係があったからなんです。鞍馬の土とその山の藻が、使いたる天狗さんにくっついてきた訳です。

私がこの現象について聞いたところ、その天狗さんは「物体はもとも霊体から変化したものだから、それにある力を加えるともとの霊体になり、またそれが物体に戻ることが出来る」と説明されましたね。とにかく、天狗さんの霊体に、砂や藻などの物体がついてきた訳ですが、大倭へ着くま

ではそれは霊体ですから、部屋が仮にコンクリート造りであっても楽々と通り、又、もと通りの物に復元するんですね。もしこれが自由に出来るようになれば世の中はどうでしょうね。こんな便利なことを教えてくれるのですが、私には出来ませんよ。命がちがいますからね。だから私は車や汽車で外出するのですが、この方が人間らしくて楽しみが多いですからね。

勿論、出来る人もありますよ。昨年いつだったか、英国のコックスとウスターの両御夫人が大倭へ来られた時、英国の交霊会で霊人がもってきたという美しい黒色のクロスを見せてもらったが、別段不思議ではない訳ですね。

心霊の動物化

次にもう少し面白いことを話しましょう。それはある女の怨霊が、生きている一匹の百足むかでになつて、男を悩ましたという物語……心霊の動物化というところですね。大阪に小西さんという大工の棟梁がいたんです。これが万人に一人もないという奇病の持主ですね。この人は桃山病院のおかかえの大工さんでしたので、発病するたびに医者泣かせをやったものです。病状、病源は無論分からず、治療は全然効果なしという世にも不思議な病でした。一口に言えば、肩あたりの筋肉が急激に痛み出すのですが、その痛みたるや口には言えないらしく、七転八倒の苦しみでのたうち廻る。ところが或る一定の時間がくれば自然におさまってけろりとする病気なんです。

小西さんは私の母のもとへ救いを求めてきたんです。母がお加持をすると、焼死した二十五、六歳ぐらいのただならぬ形相の女が飛び出したんです。それから肩の痛みが段々背中の方に廻り出し、下の方へ移動し始めたんです。同じ病状のままでね。痛み出すと近所の本門さんの信者が集まってきて、拍子木を打ってお題目を唱えるんですが、痛みは益々いきり出して、しまいはお寺の大きなローソクを尻の穴へ突込むという始末で、それは大変なもの……。母が参ると痛みは即座になくなるんです。歳の暮から正月にかけてとうとう肛門に集中してきたので、仕事もできなくなり終に病床についたんです。正月二日でした。母はお加持をした肌着に浄霊の念をこめて病人に着せたところ、不思議なことにムツキ(ふんどし)の中に垂れた大便の中で、奇怪な虫を発見したんです。白布地の上で見ると一寸五分ばかり、頭にヒゲ、針のような尾もついている。この虫が肩から肛門まで漫遊して苦しめたという訳です。大正末期のことですから今も桃山病院でアルコールに漬けられて保存しているかも知れません。当時は、病院では珍しい貴重な参考資料だったので保存していたのです。小西さんはこれで奇病とは縁切れになって喜んでた。

弟子夫婦が小西棟梁宅で同居していた時、火災が起こったんですが、火煙をくぐって弟子の嫁が大切にしていた物をとりに飛込んだところ、そのまま焼死したようです。その後、夫はリウマチで足を切断し、それからは病のたえまなしという。結局この嫁の霊が、救いを親方の方へ求めてきた訳です。これも災難でしょうが、私の母のような神通力者に巡り合うことは勘定に入っていたからでしょう。

あじさい日誌

9月13日 祝会。参加者全員が最近の様子を振り返るといって、テーマで話し合いました。藤本宏秋さん(京都府宮津市)は大倭会館泊。

9月14日 藤本さんの知人で大阪府枚方市の真和子さんが来邑。饑速日命ヒノノヒメに関心があるといふことで来られたそうです。

9月14日 夜、教務本庁で『おおやまと』編集会議。9月号の最終校正をしました。

9月15日 大倭神宮月次祭。
9月19日 午後、交流の家でIWC定例委員会。委員長の交代や現在の問題点についての話し合い、今夏のフイリピン・韓国でのワークキャンプ報告が行われました。

シルバークロウで少し心配しましたが、昇ちゃん知らなかったのか別に騒がず、多い目のお小遣いに大満足。

9月21日 群馬県高崎市の伊東信明さんが来邑されました。
9月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成5年9月の月次祭

の法話をお聞きしました(先月号に「お彼岸さん」として掲載分)。
9月28日 夜、教務本庁で『おおやまと』編集会議。10月号の「大倭大本宮伝承の紀」の原稿を読み合わせて検討。

10月6日 大倭神宮月次祭。夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。
10月10日 杉本順誠君が在籍する富雄南幼稚園運動会。小学校の運動会と共にかつては紫陽花邑のイベントの一つで、写真が本紙の表紙を飾ったものですが、現在は……。

大倭安宿宛では(菅原園)
9月13・14日 13名が京都方面の宿泊旅行を楽しみました。(須加宮寮)
9月23日 物故者墓参。18名が大倭墓地で手を合わせました。(長曾根寮)

9月17日(特養) 6名(内米寿1名、百寿1名)の方の誕生会をお祝いしました。
9月21日(デイ) 敬老会に33名がご出席。舞台上「大和なでしこの会」の民謡、踊り、三味線。記念品は職員手作りのストラップでした。(茂毛路園)

9月26日 近隣自治会やボランティアの方々、ご家族を迎えて地域交流会。食事や毎年恒例の職員によるパントマイムの出し

物(大好評でした!)。
9月30日 防災避難訓練。(八重垣園)

私の「如是我聞」
法主様から頂いた言葉
京都市 三宅 淳之
▼平成15年1月号より
「腹を立てるな・優越感をもつな・劣等感をもつな。これをあなたのお経にすればいい。別な言葉でいえば、人を恨むな。剣でいえば、人を殺すな。あんたはおじいちゃんの気質をうけているので、一本通しきってしまいがちや。引くことは引く、押すことは押す。武道の心と同じなんやで」
「武道も治療も同じなんやで」
「真の宗教家なら、社会の一番底辺に在るべきだ。乞食みたいな」

▼平成15年5月号より
「先祖を浮かべせるといふことは先祖さんを喜ばせるといふこと

「義理からやっかいみたいに、ああ今日は命日だから坊さんと呼んでこないとかんとかか…略…菓子でも供えようかとか、まるで自分たちと切り離れた別の人のとこへ、ひとつの伝統的な習慣によってやっつけているようなことでは、決して霊の世界にいての生活、姿なき人間が集まっておる自分達の先祖さんのグループの生活というのほううまくいかないんです。肉体を持っていて人と持たんと、しょっちゅう結びつきがなかったら霊の世界も現界の人たちも幸せな生活はできないんです」

※今年8月号で「信頼関係を数値化する技術」を書いて頂いた三宅さんが、以前書かれたものの引用です。(編集部)

9月13日 祝会。参加者全員が最近の様子を振り返るといって、テーマで話し合いました。藤本宏秋さん(京都府宮津市)は大倭会館泊。

9月14日 藤本さんの知人で大阪府枚方市の真和子さんが来邑。饑速日命ヒノノヒメに関心があるといふことで来られたそうです。

9月14日 夜、教務本庁で『おおやまと』編集会議。9月号の最終校正をしました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
11月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第562回祝会
11月8日(日) 文化講演会として行われます。詳細は上欄。

*月次祭(大倭神宮)
11月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
11月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

となんですね」
「義理からやっかいみたいに、ああ今日は命日だから坊さんと呼んでこないとかんとかか…略…菓子でも供えようかとか、まるで自分たちと切り離れた別の人のとこへ、ひとつの伝統的な習慣によってやっつけているようなことでは、決して霊の世界にいての生活、姿なき人間が集まっておる自分達の先祖さんのグループの生活というのほううまくいかないんです。肉体を持っていて人と持たんと、しょっちゅう結びつきがなかったら霊の世界も現界の人たちも幸せな生活はできないんです」

※今年8月号で「信頼関係を数値化する技術」を書いて頂いた三宅さんが、以前書かれたものの引用です。(編集部)

9月13日 祝会。参加者全員が最近の様子を振り返るといって、テーマで話し合いました。藤本宏秋さん(京都府宮津市)は大倭会館泊。

9月14日 藤本さんの知人で大阪府枚方市の真和子さんが来邑。饑速日命ヒノノヒメに関心があるといふことで来られたそうです。

9月14日 夜、教務本庁で『おおやまと』編集会議。9月号の最終校正をしました。

大倭会文化講演会 山の自然とともに生きて

日時 平成27年11月8日(日) 午後2時~
場所 大倭大本宮拝殿
講師 辻谷達雄氏

プロフィール:

昭和8年に吉野の川上村に生まれ、今年82歳。山仕事60年以上のキャリアを持つ村の名物男的存在。川上村に『森と水の源流館』が設立されて以来、館長を務めた(現在は名誉館長)。

「石油や原子力がなくとも、木と水さえあって体をしっかりと動かすことを知っていれば、どんな危機の時代でも生きていける」と語る。「体で覚えたことは忘れない」が信念で、培ってきた経験や知恵を次の世代に伝えていく試みとして、『山の学校・達ちゃんクラブ』を長年続けている。ハイキングや野外料理をしたりする楽しい集まりである。

※終了後、懇親会を行います。(会費千円)

9月13日 祝会。参加者全員が最近の様子を振り返るといって、テーマで話し合いました。藤本宏秋さん(京都府宮津市)は大倭会館泊。

9月14日 藤本さんの知人で大阪府枚方市の真和子さんが来邑。饑速日命ヒノノヒメに関心があるといふことで来られたそうです。

9月14日 夜、教務本庁で『おおやまと』編集会議。9月号の最終校正をしました。

9月15日 大倭神宮月次祭。
9月19日 午後、交流の家でIWC定例委員会。委員長の交代や現在の問題点についての話し合い、今夏のフイリピン・韓国でのワークキャンプ報告が行われました。

シルバークロウで少し心配しましたが、昇ちゃん知らなかったのか別に騒がず、多い目のお小遣いに大満足。

9月21日 群馬県高崎市の伊東信明さんが来邑されました。
9月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成5年9月の月次祭の法話をお聞きしました(先月号に「お彼岸さん」として掲載分)。
9月28日 夜、教務本庁で『おおやまと』編集会議。10月号の「大倭大本宮伝承の紀」の原稿を読み合わせて検討。

10月6日 大倭神宮月次祭。夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。
10月10日 杉本順誠君が在籍する富雄南幼稚園運動会。小学校の運動会と共にかつては紫陽花邑のイベントの一つで、写真が本紙の表紙を飾ったものですが、現在は……。

大倭安宿宛では(菅原園)
9月13・14日 13名が京都方面の宿泊旅行を楽しみました。(須加宮寮)
9月23日 物故者墓参。18名が大倭墓地で手を合わせました。(長曾根寮)

9月17日(特養) 6名(内米寿1名、百寿1名)の方の誕生会をお祝いしました。
9月21日(デイ) 敬老会に33名がご出席。舞台上「大和なでしこの会」の民謡、踊り、三味線。記念品は職員手作りのストラップでした。(茂毛路園)

9月26日 近隣自治会やボランティアの方々、ご家族を迎えて地域交流会。食事や毎年恒例の職員によるパントマイムの出し物(大好評でした!)。
9月30日 防災避難訓練。(八重垣園)

私の「如是我聞」
法主様から頂いた言葉
京都市 三宅 淳之
▼平成15年1月号より
「腹を立てるな・優越感をもつな・劣等感をもつな。これをあなたのお経にすればいい。別な言葉でいえば、人を恨むな。剣でいえば、人を殺すな。あんたはおじいちゃんの気質をうけているので、一本通しきってしまいがちや。引くことは引く、押すことは押す。武道の心と同じなんやで」
「武道も治療も同じなんやで」
「真の宗教家なら、社会の一番底辺に在るべきだ。乞食みたいな」

▼平成15年5月号より
「先祖を浮かべせるといふことは先祖さんを喜ばせるといふこと

「義理からやっかいみたいに、ああ今日は命日だから坊さんと呼んでこないとかんとかか…略…菓子でも供えようかとか、まるで自分たちと切り離れた別の人のとこへ、ひとつの伝統的な習慣によってやっつけているようなことでは、決して霊の世界にいての生活、姿なき人間が集まっておる自分達の先祖さんのグループの生活というのほううまくいかないんです。肉体を持っていて人と持たんと、しょっちゅう結びつきがなかったら霊の世界も現界の人たちも幸せな生活はできないんです」

※今年8月号で「信頼関係を数値化する技術」を書いて頂いた三宅さんが、以前書かれたものの引用です。(編集部)